誰が為に龍は哭く

紅瞳　愁桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
誰が為に龍は哭く

【Ｎコード】
Ｎ４５７９Ａ

【作者名】
紅瞳　愁桜

【あらすじ】
ペテン師《魔剣士》ジークフリートを筆頭に、《刀士》クロス・クリムゾン、《魔銃士》シオンの三人組。３人の堅い結束は、何人たりとも解けない。彼らの目的が果たされるまで、彼らの目的のない旅は終わらない。

【序曲】嵐の前の静けさ

「たいへん長らくお待たせしました！　いよいよ登場です！」

アナウンサーの妙にハイテンションな声と共に、観客達が騒ぎ出す。その声の大きさのため、地が揺れそうである。

その騒音ためにアナウンサーが何と言っているのか全く聞きとれない。

いつものことながら、あきれて壁に寄りかかっていると、目の前の重そうなゲートが開き、係員らしき者がこちらへと足早に駆けてきた。

いかにもマジメな感じが、その行動の端々に見受けられられる。

その係員が目の前でとまり、素早い動作で敬礼をした。

「登録名ジークのジークフリートさんと、登録名クローのクロス・クリムゾンさんですね？
　準備は出来ましたか？」

「あぁ」

ジークは短く答え、横目でクローを見る。

クローも眠そうな顔のまま小さくうなずき、愛刀を手にした。

どうやらクローはうたた寝をしていたようだ。

「それでは……健闘を祈ります」

事務的ではなく、確かな期待が浮かんだ瞳で係員が言った。

「……行くぞ！」

ジークが先に進み、クローが後を追うようにして扉の中へと入っていった。

まるで光の中に吸い込まれていくように。

【一幕】疾風の斬撃

扉を抜けると壮大な騒音と共に、日の光が飛び込んできた。
今まで二人とも室内に居たので、少々眼が痛く感じられる。

外の光に目が慣れてくると同時に、軽快なノリのアナウンスが会場に響き渡る。

「さぁ、注目の一戦です！　ジークフリート選手&クロス・クリムゾン選手　Ｖｓ　砂漠の獅子団！！　ここまで両組とも無敗です！」

紹介と共に観客がより一層騒ぐ。
かなり注目されているのだろう。

そうジークが自己陶酔に陥っていると、闘技場に設置されている大きなモニターに、それぞれへ賭けられた金額が出る。

……『砂漠の獅子団』の方が多く賭けられていた。
しかも、かなりの差だ。

それは『砂漠の獅子団』の方が観客受けが良いか、期待されていると言うことであろう。
その両方だったら立ち直れない……。

少々イライラしながらクローの方を見ると、クローもその結果に満足していないらしく、不機嫌な顔でジークを見返してきた。
その灰色の瞳は全く笑ってなく、背中に寒気が走った。
しかも静かに刀の柄に手を置きやがった！

俺がクローに殺される前に、試合よ、始まってくれ……。
天にジークが祈りを捧げたそのとき、試合開始を意味する花火が闘技場の上空へと打ち出された。

＊　＊　＊　＊

すぐにその場を離れるようにして、ジークは走り出した。
その後を静かにクローが追う。

クローから逃げながらも、素早く敵の姿を確認する。
敵も素早く移動しているためか、地上に2名、空中に1名しか確認できなかった。

まずい……敵も相当のやり手だ……。

そうなると迷ってなど居られない。
足を止め、息を整える。
そして、左手に持っていた大剣を右手に持ち替え、ジークは戦闘体勢に入った。

剣は普通、斬ったり突いたりするのに長けている。
身の丈の二倍ほどの大剣なら尚更である。

しかし、ジークの構えは一風変わっていた。

大剣の剣先を天に向け、天を突くような構えをしていた。
大剣の黒い刃が光を反射し、煌めく。

そして、目をつぶり剣身に気を集中する。
すると、ジークから凄まじい威圧感が出始めた。
それと同時に、黒い刃の中心部ほどに、赤い字のようなものが浮き出てきた。

しかし、敵さんもわざわざ待ってくれるほど優しくはない。
ジークが大剣に意識を集中しているのを好機と思ったのか、音もなく地を蹴り、一気にジークとの距離を詰めた。

地を走っていた体格の良い男が、まずジークへと攻撃を試みる。

しかし、その直前にクローが二人の間に入り込み、とっさに男の攻撃を弾く。
男の手には大きなかぎ爪がつけてあるのを、確認しながらクローは追撃しようと一歩踏み込む。

いつの間に抜刀したのか、クローの手には刀身の紅い刀が握られていた。
その刀で、男の胸部めがけ一気に突く。

しかし、瞬時に身をひるがえされ、そのかぎ爪で刀を飛ばされそうになる。
クローも負けてはおらず、かぎ爪の力をそのまま利用し、後方に跳躍した。

着地と同時に勢いよく地を蹴り、残像が残るほどの高速で一気に斬る。
とっさに男はかぎ爪でガードしようとするが、クローの圧倒的な斬

撃に爪ごと割かれてしまった。
斬られた勢いを殺すことができず、男は短い断末魔と共に吹っ飛んだ。

静かに血降りをし、納刀する。

しかし、その隙を狙い、第二弾がやってきた。
割と若い眼鏡の青年と、スキンヘッド野郎だ。

「次から次と…一体何体居やがる…」

ため息をつきながら再び抜刀の構えを取る。
しかし、油断はせず、素早く敵の様子を観察した。

しかし、眼鏡青年の手には何も握られてはおらず、一方、スキンヘッド野郎の手には大きな大斧が握られていた。

眼鏡の方は何も持っていないがどうやって戦うのだろうか。全く読めない。
スキンヘッドの方は大した力ではないな。

そう判断し、先にスキンヘッドの方へと走り、一気に抜刀した。
驚異的なスピードで刀が斬りつけ、更に刃を返し切り返す。

スキンヘッドは斧で対抗するまもなく、あっけなく絶命してしまった。

血降りをしつつ、クローは振り返る。
しかし、眼鏡は既に突破し、ジークの元へと駆けて行っていた！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4579a/

誰が為に龍は哭く

2010年10月9日01時42分発行